

◆特集◆ 能代厚生医療センター ～地域中核病院として～

いまだ収束が見えない新型コロナウイルス感染症、インフルエンザも流行の兆しが見えています。ほとんどの人が病気やけがから逃れることはできません。私たちの暮らしは医療とつながっています。

今回は能代市で大規模な総合病院であり、唯一の産婦人科がある能代厚生医療センターの太田原康成院長にお話を伺いました。



太田原康成院長

問 産婦人科の体制と人口減少についてどう思いますか。

答 以前から秋田大学医学部附属病院との強力なパイプがあり、産婦人科の医師は常に4人体制を維持しています。人口減少によるものなのか、お産の数は減少していますが、この体制を維持することが役割と自負しています。産婦人科には大潟村や青森県深浦町からも来られます。

問 救急医療体制維持や秋田大学医学部附属病院との連携はどのようなものでしょうか。

答 救急医療体制はとても大切な問題です。この病院はほぼ全ての診療科があるので、おおむねどのようなことにも対処できるようにしています。

三次救急については、秋田大学医学部附属病院と太いパイプで連携しながら役割分担をしています。少し前までは「心筋梗塞」の治療は三次救急として秋田大学医学部附属病院等へ搬送していましたが、当院で急性期治療ができるようになりましたので、24時間体制で対応しています。

問 建物が完成してからしばらくたちますが、耐震や浸水想定区域に建っていることへの対策はしていますか。

答 当院は平成元年に移転新築し、新耐震基準は満たしています。浸水想定区域への対応では、県の協力で9年前に自家発電装置の浸水対策工事等を行いました。

災害時の医療体制面ではマニュアルの更新や訓練を行っています。また、当院の災害派遣医療チームDMAT（ティーマット）を国や

県の訓練に積極的に派遣しています。



災害派遣医療チーム(DMAT)のみなさん

問 医療従事者の担い手不足についてはどうしていますか。

答 看護師確保は全国の医療機関で頭を痛めています。幸いにも秋田しらかみ看護学院が隣にあり、教育にも全面的に協力しています。卒業生から継続的に職員になってもらっているのが心強い存在でもありません。しかしそれで充分足りているわけではありません。医師の負担軽減のための医療秘書の確保もかなり苦労しています。

問 コロナ下での救急医療について変化はありましたか。

答 明らかに緊急ではないような患者も以前はいましたが、新型コロナウイルス感染症の拡大から、患者の行動変容がありました。患者が減りましたし、病院に来る、来ないの判断が繊細になったように感じます。

新型コロナウイルス感染症も5類に移行しましたが、ウイルスの力が弱くなったわけではありません。これからどうなっていくのか慎重に見ていきたいと思っています。

取材を終えて

能代市の医療を守る重要な拠点の一つである能代厚生医療センターを守っていくために行政、議会が力を発揮しなければならぬと改めて思いました。

取材：相場未来子 畠 貞一郎